

川越街道ウオーク【Ⅱ】東武練馬駅から和光市駅まで

歩行距離 約9km

集合場所 東武東上線東武練馬駅南口改札口

集合時間 午前9時45分

東武練馬駅南口(川越寄りに改札口がある)に乗るを出、右の通りを左折、街道に出た右角に下練馬宿「本陣大木家跡」がある。街道側に「川越街道 下練馬宿」解説板がある。

川越街道 下練馬宿

川越街道は板橋宿から分かれ、江戸城から川越城を結ぶ道として整備されました。ここ北町は、練馬区唯一の宿場町として栄え、現在も商店街が続いています。この辺りは上宿と呼ばれ、本陣(大木家)があり、また、徳川五代将軍綱吉が将軍になる前に脚気にかかり、下練馬村に御殿を建て移り住んでいました。大根が脚気によく効くという事から、尾張から大根の種を取り寄せ、土地の百姓金兵衛に作らせ、綱吉は大根を喜んで食べ、脚気も良くなりお城の帰りました。

将軍になった綱吉は、大木金兵衛に大根を献上させ大名に振る舞って自慢した事から、練馬大根の名がたちまち日本中に知れ渡ったそうです。

旧川越街道の歴史を活かしたまちなみ協定 北町旧跡研究会

新大宮バイパス(国道17号線)の上を越え、5分程歩くと国道254号線(現・川越街道)に合流する。国道を左に渡り、「まいばすけっと」の手前の路地に入った先に「北八風の子公園」があり、トイレ・ベンチがある。国道に戻り、豊島園通りを渡り、その先、ケヤキが聳える一郭の一番手前に「庚申塚」石塔がある。道標を兼ね、「右 川古江」「左 登古呂澤」と刻まれ、川越と所沢への分岐であることがわかる。

5・6m先の車道側に「R254 本郷から13km 日本橋から16.2km」の標柱がある。すぐある信号交差点を渡って直進すると「下赤塚駅」が左手にある。国道の左側を約10分(750m程)進むと小林商店たばこ屋があり、その前に台座に載せた細長い自然石の「庚申塔」がある。裏側に「萬延元年庚申蠟月再建」と刻まれている。(注: 萬延元年1860年)

赤塚新町三丁目の交差点を左に幅広い道路を500m程行くと「光が丘公園」があり、トイレや休憩所がある。

成増二丁目信号で国道を右側に渡り坂を下って行くと右に「赤塚交番」、前に「歩道橋」がある道に脇の覆屋の下に2基の石造物、その左脇に「小治兵衛窪庚申尊」の標柱が建っている。天明3年(1783)の浅間山噴火と飢饉の犠牲者の供養の為に建立されたものだ。窪と呼ばれるだけに一段低い場所にある。小治兵衛窪の地名については、次のような伝説がある。

『昔ここを流れていた百々向(すずむき)川に一本の丸木橋が架けられていた。とてもさびしい場所で毎晩のように強盗が出没し通行人から恐れられていた。ある朝、立派な橋が架けられていて、橋のてすりに「たくさん悪いことをしたので、罪ほろぼしにこの橋を造る。小治兵衛」と書かれた木札が下げられていた。その後は便利になったばかりか強盗も出なくなった』というもの。

2基の石造物のうち、向かって右は「第七拾週年記念碑 庚申講一同」、左は下部に三猿が浮き彫りされ、青面金剛が座った姿の珍しい庚申像である。その2基の石造物の間に解説板がある。

庚申塔

庚申(かのえさる)の日に、近隣の人々が集まり豊作や健康を祈る行事を庚申待という。この供養に立てたのが庚申塔である。

この塔の正面には六手を持った青面金剛が陽刻してある。手に弓矢、宝剣を持ち、頭髪は上指して三猿の上に座っている。坐像彫刻は比較的珍しい塔である。右面には武州豊嶋郡狭田領上赤塚村とあり、左面には天明三癸卯(みずのとう)年二月吉日と刻んである。庚申様は道祖神として交通安全や町内安全の守り神ともなっている。

このあたりは「小治兵衛久保」という地名で呼ばれていた。また、「橋を作ってくれた盗人小治兵衛」の民話が残っている。この民話と共に古くから残る庚申塔は一度は松月院に永代供養を依頼した時期もあったが、成増南町会周辺の数少ない史跡として、再びこの地に安置し、町民の心の支えとして、末永くお祭りすることにした。

昭和六十三年一月吉日 成増南町会氷川神社管理運営委員会

国道は上りとなり、成増信号交差点(右に入ると成増駅)を過ぎ、次の信号辺りから下りとなり、**リソな銀行、そしてハンバーグ&ステーキの BigBoy の先の信号**で、国道は坂を下っていくが、旧道は**国道に沿う道で、しばらく台地上を進み**、続くケヤキ並木の先で急に下る。これが**新田坂(しんでんざか)**で、坂の途中、左に「**新田坂の石造物群**」がある。

新田坂(しんでんざか)の石造物群

この案内板の前の坂道は、江戸時代の川越街道です。板橋宿の平尾(板橋三丁目)で中山道と分かれた川越街道は、上板橋や下練馬の宿を経て川越城下へ通じていました。

ここに保存されている石造物四基は、新田坂周辺から集められたものです。

道祖神は、区内唯一のもので、文久三年(1862)に建立されました。もともとは、八坂神社の入口付近にありました。

常夜燈は、文政十三年(1830)に建立されたもので、成増二丁目34番地の角に立っていたようです。「大山」と刻まれていることから道標も兼ねていたのでしょうか。川越街道と分かれて南へ向かう道は、土岐田方面へ通じていました。

稲荷の石祠と丸彫りの地蔵は造立年代は不明ですが、どちらも大切に保存されています。

昭和五十九年度、四基の石造物は区の有形文化財に登録されました。

平成十一年三月 板橋区教育委員会

左手の国道との間の小高くなったところに「**八坂神社**」がある。

新田宿(しんでんじゅく)と八坂神社

板橋宿の平尾(板橋三丁目)で中山道と分かれた江戸時代の川越街道は、上板橋宿、下練馬宿を経て、白子宿へ向かいます。

八坂神社の右手の道が当時の川越街道で、この付近は、白子川へ下るための大きく曲がった急坂(新田坂という)になっていました。

新田坂から白子川の間は、新田宿と呼ばれた集落で、対岸の白子宿から続いて街道沿いに発達していました。昭和の初期には、小間物屋や魚屋、造り酒屋などが軒を連ねていました。

八坂神社は、京都の八坂神社を勧請したといわれ、「天王さま」とも呼ばれています。御祭神は素戔鳴尊と稲田比売命です。元々は現在地よりやや南側にありましたが、昭和八年(1933)の川越街道新道(国道二五四号線)工事の際に移されました。

平成十一年三月 板橋区教育委員会

新田宿を進むと右手に古い家があり、「おーてーてつーないでー」で知られる童謡「くつが鳴る」や「叱られて」を作詞した「清水かつら」が関東大震災で疎開し、この辺りに53歳で亡くなるまで住んでいた。その先の白子川に架かる白子橋の欄干両側に「くつが鳴る」に歌詞一番・二番を記した銅板のプレートが取り付けられている。

白子橋を渡ると白子宿で、信号交差点までが下宿。交差点を左折すると中宿で、県道109号線を渡り、大阪を上った上までが上宿で、白子橋から白子坂上までが白子宿である。白子は古くは新羅からも渡来人の里であった。元々「白子」は「新羅」の転訛と言われる。この先「新倉」、「志木」、「新座」と渡来人に由来する地名が多くなる。

白子橋を渡った右側に白子宿下宿本陣の新坂家がある。信号を左折し70m程の右側の道の奥に鳥居が見える。「熊野神社」である。

熊野神社 縁起

□御縁起(歴史)

天平宝字二年(758)、朝廷は我が国に渡来した新羅の僧たちを武蔵国に移して新羅(志楽木)郷を作った。白子の地名は、この新羅から転訛したものといわれており、戦国時代の文書の中には「白子郷」の名が見える。

熊野神社は、白子の鎮守さまとして栄えてきた。発祥は不明であるが、社伝によるとおよそ一千年前といわれている。

祭神は、伊弉冉命(いざなぎのみこと)、健御名方命(たけみなかたのみこと)、速須佐男命(はやすさおのかみ)、速玉男命(はやたまおのかみ)、事解男命(ことさかのおのかみ)、倉稲魂命(うかのみたまのみこと)とされ、また境内神社として、富士嶽神社、國平神社がある。

中世、熊野信仰は、全国的に武士や民衆の間に広まった。

熊野神社が、いつの時代にこの地に祀られたかは想像の域を出ないが、熊野信仰の本拠である紀伊國(現和歌山県)那智山に伝わる那智中世文書の中にある天文年間(1532~54)ごろの「武蔵国檀那書立」の中に「しらこ庄 賀物助 庄 中務丞」という記述があり、当時の白子ではかなり熊野信仰の布教が進んでいたと推察される。

(後略)

熊野神社の境内の右には、頂上に富士浅間神社の祠がある「富士塚」がある。富士塚は高さ12m、直径30mもあり、2ヶ所の登山口があり、登ることが出来る。

神社の隣に「神瀧山清瀧寺不動院」がある。天台宗の高僧慈覚大師円仁が山中の自然湧水を見て、清涼な靈気を感じ、当地に一字を建立したのが始まりといわれる。熊野神社の境内の左奥に不動院の「乃木大将修行の瀧」がある。

乃木大将修行の瀧

日露戦争(明治37年2月～明治38年9月)において、ロシア帝国が太平洋艦隊の母港としていた旅順港の撃滅が日本の命運を決すると言われていました。乃木大将指揮する日本軍は、壮烈なる激戦の末、ついに旅順要塞を攻略し、太平洋艦隊撃滅された。

乃木大将は、旅順への出陣に先立ち、不動院本堂に一週間の参籠。この瀧に打たれ修行を行い『知者不惑』の扁額を残し出陣されました。今も本堂にその扁額が祀られ、不惑の文字に、その当時の乃木大将の心境が偲ばれます。

又、日露戦争を決意された宰相の桂太郎(第十一・十三・十五代内閣総理大臣、陸軍大将)も、不動の瀧に打たれ不動明王に祈願されました。瀧行を頭上から静かに見守って下さる不動明王は、二人の祈願に大にお応え下されたと伝えられています。

本堂の前面上には、「山瀧神」の金文字の額が懸けられ、「太郎書」とある。本堂の左下には「桂太郎総理大臣」の軍服姿の写真が額入りで置かれ、写真下に「日露戦争を勝利に導いた宰相 本堂正面入口上に“神瀧山”の扁額奉納」と記されている。

そして、その反対側には「乃木將軍」の軍服姿の写真が額入りで置かれ、写真下に「日露戦争における旅順攻撃への出陣を前に本堂に籠り不動の瀧に打たれ修業、『知者不惑』の扁額を残し出陣」と記されている。

不動院の徳川家との繋がり。家康が本能寺の変の際、自分の危機を救った伊賀忍者たちに、白子の土地を与え、徳川家の警護の任を与えたという。白子の不動院は伊賀忍者の監督を務めるようになった。中宿本陣富沢家の「富沢家文書」には、天正十九年(1591)、旧上・下白子村をはじめ8カ村の領地が伊賀忍者108人に俸禄として与えられた旨が記されている。不動院の境内には胎内巡りができる洞窟があり、又、日本最初の国営養魚場があった。

街道は県道109号線と交差する。交差点の右手前の角にある**富沢薬局**と**和光白子郵便局**が「**中宿本陣跡富沢家**」である。又、この交差点が中宿と上宿との境で、街道は「**大坂**」を曲がりながら登って行く。坂のを登りかけた途中右手の黒々とした格子の母屋、大きな土蔵ののある旧家は、「**左和屋**」という屋号で雑貨商を営んだ「**富沢家**」である。宿場の面影を残している。

右にカーブした先の左側に「**大坂ふれあいの森**」の看板があり、湧き水とその湧き水をもたらす武蔵野台地の十数万年の地層を観察でき、貴重な植物を育む森として保護されている。

坂は左から右にカーブし登り続ける。途中の左手に「**上宿本陣芝崎家**」が、右手に「**旅籠川越屋**」があったあつたあつたと言うのだが判らない。

台地上を進むと平らで、すぐに「**笹目通り**」にぶつかる。旧道は歩道橋を渡り直進する。

【**白子城山**】笹目通りを右に行き、東武東上線を越えた先の右側にある白子小学校の周辺は城山と呼ばれ、中世の城館跡とされる。学校周辺の発掘調査で堀跡とみられる溝が数条見つかった。(城山遺跡)

永正元年(1504)の**立河原の戦い**に先立って、山内上杉顕定軍が白子に15日間布陣したとされる。白子城山はこのときの陣城、あるいはすでにあつた城館を陣に取り立てたものとも考えられるが、確証はない。

笹目通りを渡るとなだらかな下りとなる。「**くらやみ坂**」と言う。坂を下りた所の右側に新しい立派な門の屋敷がある。「**代官屋敷**」と呼ばれていた所で、**旗本酒井家の代官を勤めた豪農「柳下家**」の邸宅である。その先に古い門と土蔵がある古い家があり、ここも柳下家である。そういえば、笹目通りの北角に柳下技研

(株)があった。この辺は「柳下」が多い。

少し先、上り坂の途中左に和光市消防団第6分団倉庫があり、その向かいに「伯楽製鋌所」があり、門を入った右側の祠の中に石造光背型坐像形「馬頭観世音」がある。顔が三面に向いている。

馬頭観世音

馬頭観世音は頭上に馬の顔が刻まれた観音で、怒った顔をしている。

光背型坐像形の馬頭は市内唯一のものである。

銘文は「上岡村写、天下泰平国土安穩 当村馬持中在々諸村馬持中 文化十五戊寅季四月大吉辰」と記されている。

建立は文化十五年四月(1818年)で、近郷近在の馬持ちにより、現在の東松山市上岡の妙安寺にある馬頭観世音を模して造られたものである。

馬頭観世音は本来畜生道の救済のための観音で、馬や牛の守り神として祀られた。また、馬が怪我をして倒れたところとか、病気で死んだ路傍に馬の霊を祀るために建てられたものである。

こうしたことから、交通安全を願う意味にも解せられたり、なかには道しるべの役目をしたものもある。

牛・馬を使つての交通運輸が唯一のものであった当時には想像もつかない苦勞があったものと思われる。

これら動物は、それに対する愛情によって像として刻され、神仏を符合させ、そして守護されていったのである。

昭和五十四年六月十五日

和光市教育委員会

和光市文化財保護委員会

第6分団の横の道を入った先に「武蔵御嶽神社」がある。街道を200m程進むと県道109号線に合流し、その先の「東京外環自動車道」は歩道橋を渡る。

自動車道を渡って200m程の和光市駅入口交差点を右折、600m程で東武東上線と和光市駅に着く。

今日はここまで。